



足摺岬 金剛福寺

想<sup>そ
う</sup>

創
刊
号

ネットで作る文芸同人雑誌

<http://home.goo.ne.jp/community/1695>

目次

1	「俳句と和歌」	積 ^{せき} 緋露雪 ^{ひろゆき}	3
2	「超短編二編・俳句二句」	積 緋露雪	5
3	「僕と魔女と」	長谷川 幸信	9
4	「敦賀」	池窪弘務	35
5	執筆者		45
6	編集後記		46

* 目次を左クリックして下さい。作品の頁にジャンプします。

「俳句と和歌」

積^{せき}緋露雪^{ひろゆき}

俳句

秋月夜 生の位相や 虫の声

十三夜 煙草喫みつつ 吾を追ふ

朔風に 身を曝しての 夢現

秋雨の 煙る景色に 吾も消ゆ

和歌

月影に 吾見失ひ 久しかる
分け入っても 在るは濃き闇夜の闇に ぼいと吾を 捨ててみる
いっひっひっあっはっはっ 笑ふは誰ぞぼんやりと 時を過ごして 彼岸に踏み入る
その吾 さて 何を見出したのか ふっ

詩

「憂き身」

何を思ふてか

不意に笑ひが吾が内部から迸り出たのだ

だからといって私が吾を許したことはないまい

とはいへ私は独りぽつねんと此の世にその憂き身を曝して

生きる覚悟はとつくに出来てゐると思つてゐたが

どうやら私は未だ吾に未練があるらしい

可笑しいだろ

それこんな時は吾を笑つてみるのだ

これが唯一私に残された清廉なるその生き姿なのだ

あの吾が肩に撓んだ蒼穹を私は独りで支へるしかない

しかも直立不動の立ち姿で

とはいへ私は独りぽつねんと此の世にその憂き身を曝して

生きる覚悟はとつくに出来てゐると思つてゐたが

どうやら私は未だ吾に未練があるらしい

哀しいだろ

それそんな時は吾を笑つてみるのだ

——ぷふふい。

ほら其処に逆立ちした侏儒の吾が私の影から逃げようとしてゐるぜ

私はそいつをひょいっと摘まんで喰らったのであった

——苦い！

今も侏儒の吾が私の内部で笑つてら

——ぷふふい。

超短編二編・俳句二句

積 緋露雪

「出現《他》」

「障子」

「俳句二句」

「出現《他》」

たまゆら、私は奴のその存在をほんの僅か感じただけであつたが、確かに奴は私の背後にゐたのは間違ひないことであつた。奴は私の視界の境に何度か現はれては消えることを繰り返した後、私の虚を突く形で不意に私の背後に奴は現はれたのであつた。それが奴の《他》に対する時の礼を尽くした作法なのであらう。

私も奴の礼に応へる形で後ろを振り返ることはせずに、唯奴のその仄かな存在感をじっくりと背中で堪能したのであつた。それが奴に対する私の最高のもてなし方だったのである。さう思へたのは奴が私の正面ではなく背後に現はれたことで全てが語り尽くされてゐた。つまり、奴は私との対面は嫌つてゐて私の背後にしか現はれることが出来なかつたのである。多分、奴は今尚自分の面を持つに至つてゐないのであらう。

しかし、奴の存在について私が何の疑念も抱かずに奴の存在を認めてゐることを吾ながら訝しく思ふでもないが、しかし、私が奴の存在を認めなかつたならば一体誰が奴の存在を認めてやるのか甚だ疑問である。

奴は確かに此の世に存在してゐる何かなのであった。多分、奴は《邪鬼》として何処にゐても忌み嫌はれ、未だ存在に至らざる何ものかであつたのは間違ひないことであつた。そんな奴であつたからこそ私は奴の出現を許したのであつた。だが、實際奴が私の背後に出現してみると私にはある疑念が湧いたのであつた。それは奴が私を喰らふといふ疑念である。最初、たまゆら私の背後に出現した時点では私の腹は決まつてゐなかつたのである。つまり、奴が私を喰らつても私は別に構はないのかどうかといふ覺悟が私には出来てゐなかつたのであつた。しかし

——別に奴に喰はれてもいいじゃないか！
これが私の結論であつた。

——奴が私を喰らつて仮初にも私の面を被らうが別にいいじゃないか！

多分、これが私に出来る唯一の自己変容の形、若しくは私の流儀であつたのかもしれない……。
——ほら、また奴が私の背後に出現したぞ！

俳句一句

秋雨の 煙る景色に 吾も消ゆ

緋露雪

「障子」

それは勿論晴れてゐることが前提であつたが、彼は決まつて満月の夜更けには室内の全ての灯りを消して、暫く障子越しに満月の月影をぼんやりと眺めてゐるのを常としてゐたのであつた。彼にはその月影と闇とが織り成す仄かに明るい絶妙の闇に包まれる夜更けの時

間が何とも言ひ難い時空間を演出し、それ故彼はその時空間が堪らなく好きなのであった。

――月影に溺れる……。

その日も彼は何時ものやうに障子越しに満月の月影を眺めてゐた。そしてそれは、彼が深々と腹の底から深呼吸をした刹那のことであつた。何かが障子の向かうで揺らめいたのである。それは風などの所為ではなく、何か自律的に動くものの気配が頻りに感じられるのであつたのだ。しかし、それはたまゆらのことでは何かの奇妙な気配は直ぐに月影の闇に消えたのであつた。

――確かに何かが「ゑゐた」！

そこで彼は徐に立ち上がり障子をさっと開けてみると、果たせる哉、闇の奇妙な球体がゆらりと室内に入り込んで来たのであつた。

――闇の球体？ 何なのだ？

彼には驚愕するのにも今現在起こつてゐる事態が呑み込めなかつたので、唯眼前にゆらりと浮かぶ半径五十センチメートル程の闇の球体を眺める外に取る術がなかつたのである。

――何だ、これは？

と思つた刹那、その闇の球体は彼目掛けて飛び掛かつて来たのであつた。

――ううっ。

と一瞬呼吸困難に陥つたとはいひ条、しかし、彼は闇に抱かれてゐるといふ何とも名状し難き悦楽の境地にあつたのであつた。その闇の球体は先づ彼の顔目掛けて襲ひ掛かつたのであつたが、その闇の球体が凶暴性を見せたのはそれっきりで、その後は闇の球体はゆっくりと拡がり彼の全身を包み込んだのであつた。

――ちえっ、また《無限》へ誘（いざな）ひやがる……。とは思ひつつも彼はその時嬉しくて堪らなかつたので

あった。彼は闇に包まれてゐた所為で何も見えなかったが、しかし、彼はそこでゆつくりと障子を閉め、その場に胡坐をかいて座つたのであった。

——母胎の中の胎児はきつとこんな感じの闇を味はひ尽くさねばならぬに違ひない……。それは闇を媒介として存在が存在することを弾劾しなければならぬ、それでゐてこの上なく心地よい《樂園》にありながら、しかし、存在が弾劾された末に何時《落下》するのかわ解からぬ危険を孕んだ、例へば《浄土》と《地獄》が行き来出来てしまふのを障子のみで仕切つただけの危ふい月影の中の和室の如き《場》こそ、《無》と《無限》の往復が成し遂げられ、存在が存在に不意に疑念を抱く一瞬の《存在の揺らめき》が現出する《場》に違ひないのだ！

また、何時ものやうにたまゆらの悦樂の時間が過ぎてしまった……。彼が闇の球体に包まれてゐると感じたのは彼が自ら演出した《幻影》に過ぎず、それは彼が一度ゆつくりと瞬きしただけに過ぎなかつたのである。

障子の向かうは相変はらず満月の月影の静寂に包まれた《世界》を障子に映してゐたのであった……。

俳句一句

満月の 光が誘ふ 天の浮橋

「僕と魔女と」

長谷川 幸信

「所詮この世は物語。生きるも死ぬるも物語さ。な、浩一、そうは思わねえかい。ん？ 分からねえ？ そうか、分からねえか。そうだよなあ。まだお前にやあ、分からねえかもしれねえなあ」

大正生まれの爺ちゃんは、以前僕にそんなことを言っていた。あれは僕がまだ中学生だった頃の秋の日だった。庭の落ち葉掃除の手を止めて庭石に腰を下ろし、お袋が用意した渋茶を運んでいった僕に、あの時言ったことはどういう意味だったんだろう。今だに意味は分からない。分からないが、その言葉だけは覚えていて。そんなことがあった三日後に、爺ちゃんはぽっくりと逝った。だからはっきりと覚えていて。

日頃から人生を超越したようなことを言う祖父ではあった。

青春時代を丸ごと戦争に取られ、厳寒のシベリアに抑留され、沢山の同胞の死を背負いながら、命からがら帰ってきた人だ。

その後は何もないところから必死で生活を為し、家族を作り、大正七年生まれの爺ちゃんは、気が付けば八十六才になっていた訳だ。その年代の人はみんな同じだと言ってしまったえば身も蓋もないが、尋常な人生ではなかったと思う。

あの頃中学生だった僕は、そんなに本気で爺ちゃんの話し相手にはなれなかったけれど、よくそんな昔話をしていたのを覚えている。僕はそういう爺ちゃんの話聞くのが好きだった。

あれから四年。僕は高校三年生になった。

ここは福島県の地方都市で、昔からの町には、ご多分にもれず活気がない。それに引き替え、町はずれの原野を拓いたところにできた大型のショッピングモールは、毎夜遅くまで人出が途切れず繁盛している。努力不足の古ぼけた町を取り囲んで、ぴかぴかの新しい町もどきが、周りに三カ所も出来上がっていた。

人口は約八万五千人。気がつけば、古い町は新しい町のベッドタウンに成り下がっていた。

僕が通っている高校は市立の男女共学校で、町と同じく歴史だけは古い。創立百年祭というのを半年前にやつたところだ。

創立が百年前と言えば明治時代だ。今は平成で、その前は昭和。そしてその前は大正時代で、その前が明治だ。ひよつとして、その前は江戸時代かな？などと、百年祭の時に思ったものだ。江戸は古い。古すぎる。でも現実には、江戸と明治は隣り合わせだ。

百年前というのは、それはいちいち年表でも見ないと分からないような時代なのだ。

しかし、別な考え方も出来る。百年前はとうだったか知らないが、今時の時代には百年生きる人間なんぞざらにいる。そう考えれば百年など、たったの一世代の間だ。そう思えば年表などはいらない。

ただその時に建てられた校舎が今もちゃんと残っていて、そこで僕は勉強している。今から百年前にも、この校舎には沢山の人が通っていて、この教室の中で今の僕と同じように勉強をしていたのだろうか。羽織袴の服装で。きつとそうなのだろう。そういうことが、とても不思議な気がする。バック・ツウ・ザ・フューチャーの世界だ。

町の歴史によると、この町のメインストリートは奥州街道という通りで、大昔には宿場町だったらしい。その頃の町には道の両側に商家や旅籠が並び、一本裏通りに

入ると沢山の隠れ宿があったという。

現在の表通りの商店街は、今はもう殆どが現代の造作になっていて昔の面影などはないが、裏道を歩くと一目で昔の家と分かる木造の家が、年季の入った色に染まっ
てあちこちに残っている。細かい格子造りの窓とか、黒
ずんで反り返った腰板などに、時代の流れが残って見え
る。

あの二階の出窓に女衆が横座りなつて、紅白粉おしろいの色香
で、赤い着物の手練手管で、男を手招き誘っていたのか
もしれない。

今はただ寂れた残骸があるようにしか見えないが、そ
の昔にはさぞ煌びやかな場所だったのだろう。

町全体が高台にある。そのために坂道が多く、町はず
れはどこも傾斜地になっていた。戦国の時代には二階堂
氏が治めていた町で、当時城のあった場所には二階堂神
社が残っている。

裏通りの、昔遊郭だった辺りの中程に、少し離れて古
びた寺があり、その脇にいかにも寂しげな路地があった。
その路地を道形みちなりに下って行く。道沿いには背の高い木々
が覆い被さるように生えている。樺と赤松が多い。周り
は森になっていた。

町の中心地近くに、自然の丘をそのまま残した大きな
公園があり、その路地はその公園の東の外れ辺りを通つ
ている。歩くうちに、自然と森の中に入っていく。市が
管理している公園なので下草などは丁寧ていねいに刈られ、いつ
来ても歩きやすい。頭上からの木洩れ日が気持ちいい。
そのまま森の緩い傾斜を下っていくと道は徐々に平坦
になり、やがて森の中から大きく開けた広場に出る。

広場も森からの続きで、背の高い樺けやきやブナの木など
があちこちに生えている。だがその目の前には片側二車
線の道路が横切っていて、交通量は激しい。そして更に
その通りの向こう側に目をやると、三年ほど前に完成し

たばかりの大型のショッピングモールが見える。

緑茂れる森や林の中に、広大な広さでひとつの町が出来上がっていた。

町の裏通りからはほんの五・六分ほどの散歩だが、手入れの行き届いた森の中から、突然車が激しく往来する風景に出会々と、初めての人ならちよつと驚くかも知れない。でも僕としては、このミスマッチのように変身する森と町の境目が好きだ。

森から広場に降りる緩やかな斜面の途中に幾つかの店がある。大きな櫓の下にあるのが古着のリフォーム屋。少し離れて、二本のミズナラの木に挟まれているのが菓子パンとかラーメンを商っている店。そして桜の古木の下にあるのが、小さな喫茶店。それぞれが横並びにほんの少し上下にずれた形で建っていた。そして更に、向この道路に近いところに、ポツンと離れて花屋がある。道路脇の歩道は、この丘の上にある高校と中学校の通路になっっているし、町の人達もよく利用している道なので、すぐ向こうに何でも売っているショッピングモールがあるにもかかわらず、これらの店はそれなりに賑わっているようだ。

ここは環境がいい。山中でもなく、雑多な町中でもなく、緑溢れる場所に身を置きながらも、結構用事が足りる。今日のような暑い陽射しの日でも、上空を被っているたつぷりの木の葉がそれを防いでくれる。

友達同士の待ち合わせ場所としてもいいだろうし、家庭の若い主婦同士のたまり場としても都合がいいみたいだ。見ればその通りで、いつも高校生とか若い女性達の姿が目立つ。

ショッピングモールに行く人は大概是車で行く人が多い。広い道路が横切っているから、町から歩いては行きづらいのだろう。それにすぐそこに見えてはいても、結構な距離がある筈だ。でもこの広場に来る人は殆どが徒

歩で来る。町から近いからだ。散歩がてらに丁度いい。

僕は町田浩一、十八才。高校三年生。今は夏休み中だ。父親の妹で鏡子さんという人がいるのだが、すぐその、三軒の店が並んでいる真ん中の、菓子パンやラーメンを商っている店は、その鏡子叔母さんが経営している店だ。

この叔母さんがちよつと変わっている。他の人にはどう見えているのか知らないが、僕にはとても変わって見える。例えば僕の母親と同じく家庭の主婦には違いないのに、少なくとも僕の母親とは全然違う人だ。

三年前にその道路が整備されると同時に、ここに店を構えて商売を始めたのだから、普通の主婦よりは積極的な人生を送っているのだと思う。しかしその反面、どことなく世捨て人のように振る舞っているようなところがある。僕にはそう見える。またそんなところが魅力的にも思える。

容姿は普通よりちよつと痩せた感じで、鼻筋の通った美人だ。一重まぶたの目は切れ長で涼やかだが、睨まれると怖い感じがする。しかしその目が大きく見開き、優しく見つめられると、どきどきすることがある。三十八歳の人妻だ。

特に印象的なのは髪だ。真っ黒な髪がとても豊かで、いつもふさふさとしている。それにカールをかけているから尚更豊かに見えて、顔の大きさの三倍も四倍もふさふさに見える。僕が子供の頃には、魔法使いのおばさんかと思っていたことがある。でも美人だ。

店は間口三間の木造で、L型カウンターは立ち食いにしてある。その右側の窓際に四人掛けのテーブルがふたつ。手前の棚に菓子パンとか牛乳などが入った冷蔵ケースが置いてある。

その他店の外には、花屋を含めた四軒の店がそれぞれに、幾つもの椅子やテーブルを広場のあちこちに配置し

てあった。誰でも使えるようにしてある。

左隣の喫茶店にしても右隣の古着屋にしても、ここでは店内より外のテーブルでくつろいでいる人の方が多い。それぞれの店も大型のガラス窓などを採用して、内外の境目が気にならないような造りにしてあるようだ。

叔母さんの店の屋号は「みずなら」という。店の前と後ろにかなり年月を経たミズナラが二本立っている。

カウンターでラーメンを立ち食い中の男女が一组。奥のテーブルにはスープレを飲みながらパンを食べている若い女子が三人いた。

この広場の四軒の店がなぜ人気があるのかというと、安いからだ。家庭の主婦や高校生。それと、昼休みに車で立ち寄るサラリーマンを客に想定して営業している。四軒とも職種は違っても、それぞれの創意工夫で値段を安く押さえている。そういう店だけがこの広場に集まった。

例えば、古着屋は若い夫婦がやっているのだが、大人の古着を切ったり張ったりして、新しいデザインの子供服に作り直すのが得意なのだ。叔母さんが言っていた。店にはいつも小さな子供がいるような若い主婦達が集まってくる。その人達を相手に、リフォーム教室のようなこともやっている。

喫茶店は近くの農家の長男夫婦が経営している。斜面上近くにあるのだが、この広場の中では一番見晴らしがいい。そもそもこの場所の地主なのだ。農繁期には農作業に精を出し、自分のところで採れた米野菜などを、店の前に並べて安く売っていた。

特にサイズや形が農協の規格に当てはまらなかったものなどは、タダみたいな値段で譲ってくれる。せっかく作ったものを、捨てるくらいなら誰かに食べて貰いたいというのが店主の考えだ。そして厨房に客を入れ、その日採れた野菜を使った料理教室のようなこともやっている。

る。ここは近所の主婦達のたまり場になっている。

花屋は「鈴木花店」という看板が出ていて、五十才くらいの夫婦が経営している。この夫婦は本心から草花が好きらしく、趣味が高じて花屋を始めた人達だ。

売り物の苗の殆どを自分達で種から育てているらしい。自然の気候に任せた苗作りをしているので、春の花は春になってから出来上がる。ホームセンターなどでは、まだ冬の内に春の花が販売されているから、そういうものと比べると季節がワンテンポずれる。それが却って好評らしい。

本格的な温室も必要ではなく、ビニールハウスだけでできるので、暖房費などのコストはかからない。パンジ―もビオラもインパチェンスもその他の花も、とても安い値段で売られている。近頃は家の周りをたつぷりの花で飾ることが流行っているから、値段さえ見合えば大量に捌けるらしい。

さて僕の叔母さんの店はどうかというのと、これがとても叔母さんらしいのだ。まずラーメンはインスタントラーメンを使っている。これには驚く。あのビニール袋に入っている即席麺だ。そこにたつぷりのネギとかワカメとかをのつけて出している。一杯百円だ。その他に野菜の天ぷらを山盛りのにのせると二百円になる。

天ぷらにする野菜は、地主でもある喫茶店からタダ同然で分けて貰っている。その日その時の材料次第で、天ぷらの他にスープができたり、野菜の煮込み料理ができたりする。味はともいい。叔母さんはやはり魔法を使うと僕は思っている。

このように、それぞれの店が頑張って工夫を凝らしている。そしてそれぞれの店の特徴がこの広場で助け合い、もたれ合って、いい味を出しているのだと思う。もしもこの中の一軒でも欠けてしまったら、人気のバランスは崩れる。

あの生地はビロードというのだろうか。違うのかな。僕にはよく分からないが、叔母さんはいつも真っ黒で艶のあるロングドレスを着ている。そして幅の広い赤い布を、たっぷりの髪に鉢巻きのようにして巻いている。エプロンも赤だ。赤と言ってもいわゆる赤ではなくて、あずき色に近いような朱色の生地だ。叔母さんはこの服装を仕事着と決めているようだ。いつもこの格好で店にいる。

縦横に棧が入っているガラス戸を引くと、上に付いている鐘がカランと鳴る。僕が入っていくと、カウンター奥のテーブルでカボチャを切っていた。

目が合い、僕が気楽に手を挙げて挨拶をする。そして壁際からカウンターの下を潜り、奥の小部屋にある赤いエプロンをつけ、頭にはバンダナを巻いた。いつものことなので自然にそうしていた。

そこに丁度四人の客が入ってきて、奥のテーブル席に座った。客が入れば、いらっしやい、と声を掛ける。二人の声がだぶった。驚いた。鏡子叔母さんの声じゃなかった。

慌てて顔を見ると、陽子だった。叔母さんの娘だ。僕と同じ高校三年生で、隣のクラスにいる。いつもはジーンズにシャツ姿で手伝っているのに、今日はどうして叔母さんの黒いドレスなど着ているのだろう。たっぷりの髪の毛も、一重の瞼も、シャープな感じの横顔も、叔母さんと同じだった。このスタイルは鏡子叔母さんだという先入観があるからだろう。さっき真正面から目が合った筈なのに、気づかなかった。僕の脳は陽子を鏡子叔母さんだと思い込んでいた。

「ぼやぼやしない」

僕の驚きを見透かしたように、左の唇だけで薄く笑いながら言っている。その笑いを見たときに、わざとやったと分かった。憎々しいヤツだ。そして右手の包丁をぴ

らびらせせ、テーブルの方を指している。注文を聞きに行けというのだろう。目の前のカウンターに客がいなければ、行きがけの駄賃で拳固のひとつも食らわしてやるところだ。

考えてみれば、陽子はいつも気だるそうにしている、生意気で、不良みたいで、いつも何にもしてなさそうなのに、いつの間に全部終わっていて、そういう鏡子叔母さんの変な性格まで、しっかりと受け継いでいる。学生服を脱ぐと、とても高校生には見えない。

袋からラーメンを四つ出して、煮えたぎっている鍋に入れながら陽子を見ると、坦々としてカボチャを切っている。愛想のない女子高生だ。

「お前、なんでそんな格好してんの？」

「お母さんの代理」

「ふうん。叔母さんは？ 今日休みか」

「上にいるよ。夕べ夜更かししたから、眠いんだって。

寝てる」

「夜更かし？ ここでか？ 珍しいな。そこで、お前はなんでそんな格好してんの？」

「お母さんの代理」

調理場の後ろには小部屋があって、そこから二階に登る階段がある。二階といっても屋根の三角部分を利用した中二階だが、結構広くて、その気になれば住むことだってできると思う。

陽子は僕が今日ここへ来ることは当然知っていて、ちよつと驚かしてやろうという魂胆で母親のユニフォームを着ていたに違いないのだ。それは、さつきからずつと下を向いたまま、口の端がピクピク引きつっていることとで分かる。

「根性の悪い娘だ。それで、気は済んだのか」

僕が無然としてそういうと、今まで堪^{こら}えていた笑いに限界がきたようで、カボチャに突っ伏して笑っている。

陽子とは従妹^{いとこ}同士で家も近いので、子供の頃から兄妹のようにして育ってきた。それが近頃は色々な場面で、姉弟のように見られることが多くなってきた。気がして、ちよつと癪に障る。

「ねえ、近頃お母さん変なのよ。浩一君、気が付かない？」

「とつくに気が付いてるよ。叔母さんはずっと昔から変だろうよ。今更なにゆってんだよ」

「そうじゃなくって、近頃よ。近頃すごく変なの。ここに座って、お客が来てもボーっとしてたり、表の椅子に座ってタバコぷかぷかやってるのよ。どこ見てんだか、外なんか眺めて、仕事そっちのけなの」

「いつもと同じじゃないか」

「いや、そうなんだけど、そうじゃないのよ。分からないかなあ、いつもとはちよつと違うんだよねえ・・・同じなのかなあ？」

それは僕も気が付いていた。叔母さんは自分の気に入ったこととか、今興味のあることに取り敢えず集中する性格なのだ。そしてそれが一段落すると、ボーっと放心状態になる。氣の入れようが強すぎて、片づく反動で氣が抜けるのかも知れない。

でも近頃は何もないような時でも、ただぼんやりと考えているような時がある。陽子がボーっとしているというのは、あれは何かを考え込んでいることを言っているんだと思う。

「叔母さんは、夕べは何で夜更かしなんてしてたんだい。また氣まぐれで、星でも眺めていたのかな。叔母さんは昔っから、ロマンチストだからなあ」

普通の主婦なのに主婦らしくなくて、いつも自由を装っているようなところがある人だ。陽子という子供もいるし、亭主もいるし、主婦がそんなに自由なはずがない。それなのにこのような店まで始めたら、尚更不自由にな

と思ったのに、そうではなかった。この店は叔母さんの自由の拠点なのだ。結構凄い人だと思う。

陽子と話している内にカウスターの客が帰った。どんぶりを下げて洗い始めた処に、新たに三人の男性客が入ってきた。天ぷらラーメン三つ。

ラーメンに天ぷらもけっこう合うものだ。特にインスタントラーメンの味というのは、日本人なら誰でも知っている味だから、これに目を付けたのは叔母さんのヒツトかもしれない。

この店の天ぷらは大きい。それが二つもどんぶりに載ると、なかなかの量になる。スープにも野菜がたっぷり入っているの、元がインスタントラーメンだとは思えない。これで二百円はずいぶん安いと思う。だから若い男女の客などが気楽に入ってくる。

夕方になると、近所の主婦達が天ぷらだけを買いに来る。一枚五十円。これもよく売れているみたいだ。

僕がまだどんぶりを洗っているの、陽子がすぐ隣りにある大鍋まで来てラーメンを茹で始めた。袋から麺を出し湯に入れて、菜箸で調子を取っている様子が目の端に入っている。

「なあ、それで、叔母さんは何か言っていなかったかい？」

「なんも言っていないよ」

びっくりした。隣にいるのは鏡子叔母さんだった。ドキツとして、どんぶりを取り落としそうになった。

「まったく、なんて親子なんだ、ここは」

ぐっと、後ろを振り向くと、陽子はまたカボチャに突っ伏して笑っていた。叔母さんは左の唇の端だけで薄笑いしている。

僕が後ろを向いている間にふたりで目配せしながら、そっと入ってきたのだろう。顔も性格もそっくりだ。

真っ黒なドレスに赤いエプロンをした魔女がふたりい

た。

僕はここにアルバイトに来ている訳ではない。この店やこの広場の雰囲気が好きだからよく来るのだが、来ればただいるのも難だし、適当に手伝うことにしている。この店の仕事も妙に好きだし、気が向いたときだけ仕事ができるのなら、それも心地よいと思っている。

「ねえ、浩一。あんた何か知ってんじゃない？　なんかそんな気がするのよねえ。あんたって、子供の頃からちよつと変わってるとこあったからねえ。ねえ、私に何か隠してない？　私が何か言ってなかったかって、何？　なんのこと？」

実のところ、この叔母さんにしつかりと見つめられて、女にしては低音の声で何か言われると、ドキドキする。ましてや、にじり寄られて、あの冷ややかで美人の顔がすぐ目の前まで迫ってきたら、隠し事はなかなか難しいだろう。

「あのね、叔母さんに変わってるなんて言われたらお仕舞いだよ。隠してるって？　何かって、何さ。僕が叔母さんに何を隠すの。何の話？　何にもないよ」

何もなくとも、ついしどろもどろになってしまう。

「なんか、怪しいんだよねあ・・・　近頃よく来るようになったし。まあ、いいけどさあ」

叔母さんは麺を茹で上げると、粉スープを溶かし込んだどんぶりに野菜スープを注ぎ、天ぷらを二枚ずつのせた。そして仕上がった順にカウンターへ差し出している。その一連の仕草がいかにも気だるそうに見える。でも決して動作が遅い訳ではない。いや、むしろ早い。なのにとても気だるそうに、あまりやりたくなさそうに見えてしまう。それがこの叔母さんの変なところだ。

店の出入り口から広場を見下ろすと、背の高い櫓けやきや橡とちの木の右側に鈴木花店が見える。店先の二カ所に棚が作られていて、向かって右側にはキュウイフルーツ、左

側の棚にはアケビが、沢山の青葉をまるで緑の雲みたい
に茂らせていた。

そして店先のあちこちに、わざと不揃いのように設置
されている低い台の上には、自家育苗されたパンジーや
ビオラ。その他、ノースポール、インパチェンス、挿し
芽で増やしたと思われるゼラニウムやカクタスの類など
が、山盛りになって置かれている。

花店のある道路際は昔の奥州街道の一部だ。その名残
として、おそらく優に二百年以上は経っていると思われ
る、太くて天をつくような背の高い松並木があつた。

緩くカーブを描くように町から続いている道路際に、
ずっと遠くの方からこちらまで、十九本の松が立ってい
る。少し前まではもっと多くあつたらしいのだが、近年
松食い虫にやられてしまい、所々歯が欠けたように枯れ
落ちていた。その昔には、このような松並木が道の両側
に延々と続いていたのかも知れない。

その向こうから数えてきて十七本目の松の木が鈴木花
店の入り口の処にあり、その根株の傍に石のお地藏さん
が立っている。そしてお地藏さんと並んで、阿弥陀如来
が浮き彫りになった平べったい石碑が立っていた。

阿弥陀如来像は気の毒なくらいに風化していて、顔も
形も殆ど判別できないような有様だが、後ろに立ててあ
る市の案内板に阿弥陀如来像であるという説明が書かれ
ていた。石版の後ろにも細かく色々と彫^ほられていたのだ
が、全部は読めない。説明書きによると、鎌倉時代のも
のらしい。

この広場で商売をしている人達は、朝な夕なに、何か
しらお供え物を持ってお地藏様にお参りをしているよう
だ。また近所の年寄り達も、前を通るたびに手を合わせ
ている姿を目にすることがある。

叔母さんが僕に何か隠してないかというのは、きっと
このお地藏さんのことを言っているのだと思う。それな

らそうと、はっきり言えばいいと思うのだが、そう言えないということは、おそらく叔母さん自身が、何が変なのかよく分かっているのだと僕は思っている。

夏休みになってからというもの、僕は雨でも降らない限りは毎日のように広場に行って、叔母さんの店を手伝ったり、木陰で本を読んだりして過ごしていた。

僕は爺ちゃんが亡くなってからというもの、物思いにふけることが多くなった。自分でそう思う。何をそんなに考えているのかと言われても困るのだが、死ぬってどういう事なのか、人がこの世からいなくなってしまうというのは何なのか、そんな、考えてもしようがないようなことを考えている。いや、本当は考えなど何もなくて、ただボーっとしているだけのようない気がする。だって、爺ちゃんが亡くなってから、もう四年も経っているのだから。

僕がまだ中学生だった頃、朝方学校へ行くときには、爺ちゃんはいつも庭先にいたような気がする。

庭は広くはないけれど、花壇になっている部分と幾つかの盆栽が置かれている部分とに別れていた。

僕が玄関の戸を開けて爺ちゃんの方を向き、行ってきましたと、挨拶をする。すると爺ちゃんは決まって、うん、気をつけてな、と言ってくれた。いつも同じ言葉だった気がする。

学校から帰ってきた頃には、冬の寒い日には炬燵こたつに入って、たいがいはテレビを見ていた。暖かい日には縁側で新聞か本を読んでいることが多かった気がする。

夜は茶の間で、みんなで話をしたりテレビを見ていた。話って、何の話をしていたんだろう。たぶん学校での出来事とか、世間話のようなことだったと思うんだけど、改めて思い出そうとすると思い出せない。毎日の暮らしなんて、そんなものだろう。それにしても、何の話をしていたんだろう。思い出せない。

今日のような夏の暑い日には、庭先で土いじりをして
いることが多かったように覚えている。特に急いでやる
ような用事は何もなくて、作業に飽きたらその辺に座つ
てお茶を飲んだり、婆ちゃんに隠れて昼間から酒を飲ん
だりしていたことも知っている。

そんな風にして、爺ちゃんは、振り向けばいつもそこ
にいた。

だから僕にとっての爺ちゃんは、この世にいた頃の爺
ちゃんも、死んでから四年経った爺ちゃんも、どちらも
同じようなものなのだ。

「こら、浩一。なにごちやごちや言っただ。こんなご
時世なんだからな、いい若いモンが、その辺で一人でブ
ツブツ言っていると、警察に電話されるぞ。変なあんちゃ
んがいるってな。へへへ」

ほら、いつだってその辺にいるんだ。

鼻眼鏡の老眼鏡の上から、やぶにらみで僕の方を見て
いる。新聞を両手で広げて、縁側に腰掛けていた。

「やあ、爺ちゃん。丁度良かった。いちど聴こうと思っ
ていたんだ。ずっと以前に、爺ちゃん言ってたよね。所
詮この世は物語だって。僕ずっと気になっていたんだ。
あれって、どういう意味なのかな？ 生きるも死ぬも物
語だって、言ってたよね。覚えてるかな」

爺ちゃんはやぶにらみの細い目を、ちよつとだけ丸く
して言った。

「ああ、勿論覚えてるともさ。ふふ、お前も妙なことを
気にするヤツだな。ちっちゃえ頃からそうだったもんな。
そうか、気になるか。でもな、そんなことは何にも気に
することはねえよ。お前はもう答えを知ってるじゃねえ
か。今俺とこうしていることが答えだよ」

庭先には二階の屋根に届く背丈の木蓮もくれんの木があった。
今は大きな葉っぱをもくもくと湛たえていて、暑い陽射し
を遮さへっていてくれる。爺ちゃんの姿は、そのたっぷり

の葉っぱをすり抜けてきた数丈の木洩れ日に透けて、ゆつくりと消えていった。

「もう、いっつも、肝心なところで消えちまうんだもんなあ。えっと、なんだって。僕はもう答えを知っているって。まったく、相変わらず訳の分からないこと言ってる。という事だよ。知らないから訊いてんじゃないかよ。答えを知っている？　僕が？　知らねえよ。ちゃんと教えろよな、訊いてんだから。まったく。おい、爺ちゃん。出てきてよお」

あの広場の前の道路は左へ行くと町に行くが、右の方へ行くとなだらかな上り坂になっていて、行くごとに手前の町から離れていく。その離れていく上り坂の途中が三角州みたいな土地になっていて、そこに沢山の石塔が置かれていた。それは、年季の入った不揃いな墓石でも置かれているような感じがして、とても異様な雰囲気がある。

そこにも市の案内板が立っていて、これらの石塔は元々この町のあちこちの辻に立っていたものを、区画整理や道路の拡張工事に伴い、やむなく一カ所に集めたものだと言っていた。平たく言えば、邪魔だからどけたということだろう。墓石ではないようだ。

数えてみたら、とても大きなものから小さなものまで、全部で四十三基あった。また、昔ながらの場所に今でも設置されたままのものもある訳だから、まだ相当の数が残っているのだ。

僕はあの大松の根本にある地藏尊と石碑が気になって調べてみた。図書館に行つて調べたのだが、全体的なこととは分かつて、個々のものについては分からなかった。こういうことって、どこで調べればいいのだろう。

古くからの民間宗教のようなもので、庚申塔というのがあった。かなり大きな石に深々と文字が彫られている。また十三夜とか二十三夜とか、石に彫られている石碑も

多くある。これも大型のものが殆どだ。これらは月にまつわる祈りの碑らしい。昔の人は月と話ができたみたいだ。昔の暦は月から作ったのだ。それと馬頭観世音の供養塔。これは文字通り馬供養なのだろう。昔人間と馬は、とても親密なつきあいをしていたのだ。これも何基もあった。地藏尊は地域の守り神で、日本全国とてもポピュラーなものだが、場所によっては、ただの石ころを地藏尊のように奉っているところもあるらしい。どんなものでも、年季が入れば神が宿るのだろう。

そして地藏尊の脇にある阿弥陀如来が浮き彫りになった石碑については、飢饉とか疫病と関係があるらしいことが分かった。

昔はなぜか周期的に、全国各地で飢饉や疫病が発生した。そしてまた当時のことから、戦も度々あったのだろう。戦のたびに農民は略奪され、殺された。つまり昔の時代には、各地で万単位の人々が死ぬという事態が周期的に起こっていたのだ。

特に飢饉は酷かったらしい。有名なところでは江戸時代に入ってから、寛永の飢饉、享保の飢饉、天明の飢饉、天保の飢饉が知られている。寛永から天保までの凡^{およ}そ二百年間の間に、大飢饉が四回も起きている。そしてその都度、何十万人もの人が死んでいたのだ。このことは学校でも習ったが、詳しくは覚えていなかった。

当時は藩という単位で各地に国があつた訳だが、東北のある藩は飢饉のために藩の人口が半分ほどに減少してしまったというから凄まじい。

飢饉というのは文字通り飢饉なのだから、食べるものがなくなってしまう訳だ。それも数年に渡って続く。腹が減っても食べるものがなくて、餓死する訳だ。女房、子供、親、兄弟、そして自分自身も。辺り一面の全員が、ただ痩せこけて死んでいく。これは辛いだろう。改めて自分で調べてみると身につまされる。

人々は為す術もなく無惨に死んでいった。そんな絶望の中でできることといったら、祈ることだけだったのに違いない。信仰や宗教はそのようにして発生するものだ。人々はひたすら祈った。藁わらにもすがる思いで、ただ祈った。その祈りの対象として、形あるものが必要だった。そして彫られたのがあの阿弥陀如来像なのだ。あのような像が三角州の処にも三・四基あった。

きつと広場の大松のところにある阿弥陀如来像にも、何百、何千もの人の祈りが込められているのに違いないと思った。

こんな事を調べ始めたのが今から一ヶ月ほど前のことで、その頃からあの広場の空気が変わり始めたのだ。

具体的にどう変わったのかというと、はっきりとは言えない。ただ僕があの広場に行くと、何かが傍に寄ってくるような気がすることがある。何なんだかは分からない。そんな気がするというだけのことだ。

初めは気のせいかと思っていたのだが、どうも鏡子叔母さんもそんな気がしているらしいことが分かったから、たぶん何かあるのだと近頃は思っている。

僕はあの後、僕なりに考えてひとつの結論を出した。

あの後というのは爺ちゃんが死んだ後のことだ。

世界には沢山の宗教がある。しかしこの際、世界のこ
となど考えてみてもしょうがないから、日本のことだけで考えても様々な宗教がある。仏教にしても神教にしても、ひとつではない。

人が亡くなるとお弔いをする。家族親族が集まって
懇ねんごろに、その宗教に従ってお葬式は進められる。そして最後にはお墓に入り、仏様になるのだ。

これらの葬儀とは、誰のために行われるのだろうか。考えてみた。亡くなった人のためだろうか。勿論その通りだろう。でもそれは表向きのことであって、実はまだ死

んでいない人のため、生者のためのものではないのだろうかと思ったのだ。

生きている人達が、死んでしまった人に対しての未練を断ち切り、その人がいなくなった後もしつかりと生きていけるように、その踏ん切りを付けるための行事がお葬式なのではないのだろうか。

だから葬儀は勿論、お盆などの仏事とか、一周忌とか三周忌とか、そもそもお墓というもののさえも、全ては亡くなった人のためのものではなくて、それはみんな生きている人達のためにあるのだと思ったのだ。

だって、どう考えたって、人が死んでしまったら全ては無に帰すのみなものだから。死んだ後で何をしてもらおうと、死者は何も感じないだろう。感じるのは生者だけなのだ。

でもただひとつ、死者が生き返る方法がある。僕は四年間かかって、それを発見した。

その方法とは、忘れないことだ。いつも、いつまでも、その人のことを思い、その人を感じていることだ。難しいことではない。苦楽を共にしてきた人とか、長年ひとつ屋根の下で暮らしを共にしてきた人なら簡単にできることだ。

考えてもみるがいい。今こうして生きているということは、今生きているだけにすぎないのだ。昨日のことは既に終わ^{すで}ったこと。終わったことは死んだことも同然。過去の記憶にすぎない。過去の記憶だけなら、死んだ人にだってある。明日のことはまだ分らない。どんな人でも、明日も必ず生きている保証などないのだから。

だから、生きていると言うことは、今のこの一瞬^{はかな}があるというだけのことなのだ。生など、とても儚^{はかな}いと思う。だからこそ大切にしたい。

これが僕が出した結論だ。

四年間もの間、ああでもないこうでもないと考えて、

こんな結論しか出せなかった。でも僕にしては上出来だ
と思っている。やっと、爺ちゃんがなくなったという
ことに踏ん切りがついたのだ。

だから、爺ちゃんはいつでも僕の傍にいる。僕の記憶
の中で生きている。そして記憶はどんどん進化する。僕
が生きている限り。

「そっかあ。分かったよ、爺ちゃん。だから、生きるも
死ぬも物語なんだね。なあんだ、そういうことか」

「ああ、そういうことだ。あのどん百姓から成り上がっ
て、天下まで取った秀吉でさえ、浮き世のことは夢のま
た夢と言ってくたばったんだよ。過ぎちまったら、何で
も夢みてえなモンなのさ。だからな、お前も生きてるう
ちに、自分の物語をいっぱい作っておくんだぞ。いい
な」

木蓮の木陰に座り、サツキの盆栽をいじりながら爺ち
ゃんが笑っていた。

夕方になると森の広場はとてもロマンチックな色に染
まる。周りを取り囲む背の高い木々が、ライトアップさ
れて緑が際だつ。四軒の店にも灯が灯り、それぞれの店
内の様子が外からもよく見えるようになる。広場の上に
ある公園の森も、遊歩道に沿って点々と、防犯灯に明る
く照らされている。その明かりが遠く近く、木の間隠れ
に見えている。

日暮れても、森の広場は結構沢山の光が飛び交って明
るくなる。

外のテーブルには、ガラスの筒に入れられた大きめの
キャンドルが灯され、それが燃え尽きると広場の店は閉
店となる。

この夕暮れのテーブル席がなかなかの人気で、季節の
よい時期には若い人達で取り合いになるほどだ。

以前に図書館で調べものをした後、もっとよい資料は
ないかと博物館に出向いた。市の博物館はこの公園の森

を越えた丁度反対側にあつて、兩岸が石組みされた小川が流れる崖の上に建つていた。

有料の資料室があつて、そこなら昔からの古文書のよ
うなものが揃つているというから勇んで入つてみたが、
古文書や昔の文献などというものは、とても日本語とは思
えない。僕などには外国語みたいなものだった。

それでも折角入つたのだからと、所々の飛ばし読みで、
読めるところだけ読んだものだ。

そういう中に昔の資料を現代文に直したものがあつて、
この町の大昔に、飢饉によりどの村が全滅になつたと
か、何村の庄屋が代官所に陳情にいったとかという記述
があつた。

そういう中のひとつに、何月何日に何村の誰が死んだ、
次の日には誰と誰が死んだ、というように、生々しく当
時の惨状を記したものがあつた。村のまとめ役でも書いた
のか、或いは役人の手になるものなのか分からないが、
悲しくも珍しい資料だ。

その資料を読むうちに、鹿ノ出口村という記述が目につ
いた。カノデグチムラ。これは、あの石版の裏に書いてあ
つた。うつすらと読めた。漢字ではシカノデグチム
ラかと思ひ、飛ばしそうになつたが、何かが引つかかつ
た。言葉にして読んでみたら分かつた。

阿弥陀如来の石版の裏には、カタカナでカノデグチム
ラと彫つてあつたのだ。鹿をカと読んだらぴたりとはま
る。やつたと思つた。

享保十八年、七月・カノデグチムラ・キチゾウムス
メ・ヨシ死去十歳。餓死。

その他にも岩淵村とか谷中村とかの記述があつたが、
鹿ノ出口村とはつきりしているのはそれだけだった。

現在のあの広場の住所は翠^{みどり}ヶ丘だが、市役所で調べ
たら、今から四十二年前までは、鹿^かノ出口一番地ノ二と
なつていた。間違いない。たぶんそうだと思つていたが、

住所変更があったのだ。ここまで調べられるとは、僕としては大変な努力だ。名探偵だ。

それにしても、今から二百七十年以上も前のことが、このようにして分かることに驚いた。もう誰の記憶にもないことが、記録には残っていた。

享保の大飢饉。全国の死者数九十万人とも言われている。特に東北地方が酷かったらしい。テレビでおなじみの、暴れん坊将軍吉宗の時代だ。

キチゾウムスメ・ヨシ十歳。十歳なら小学四年生くらいだろうか。数えて十歳なら満で九歳だから、三年生くらいか。どんな子供だったのだろう。

「浩一、そろそろ、ひまでしょ。ふたりで、店見てて」
いつの間に來たのか、鏡子叔母さんが僕の背後から耳元で囁ささやいている。ドキリとする。ふたりでというのは、陽子とという意味だろう。

月の光に誘われるのか、はたまた夜が待ち遠しかったのか、夕暮れ時になると魔女は、いつも仕事に飽きるのだ。今時分の店は結構賑わっているというのに。それにしたって、日本語が変じやないのか。

「そろそろって、なに？ 暇じやないけどね。まあ、いいよ」

そもそも、僕の返事など聴いてはいない。僕を体で押しつけるようにして、タバコと缶ビールを持ってテーブル席に座っている。

「残念よねえ、芳子ちゃんが何でも食べられるのなら、何だってご馳走しちゃうのにねえ」

広場の中央にある大櫓が、地べたから上空に向かってライトで照らされている。もくもくと大きな傘を広げたように茂る青葉が、とても綺麗だ。そしてその下にあるテーブル席の向こう側には、カノデグチムラのヨシが座っていた。

「いいえ、いまはもうお腹は空きませんから、大丈夫です。どうもありがとうございます」

焦げ茶色と、所々に赤色が混じったような模様の着物を着ている。おかつぱ頭で、まだちよつと悲しそうな目の色が気になる。赤い鼻緒の下駄だけが真新しい。

「さて、それじゃ、僕はちよつと店の仕事をしてくるからね。また後で話そうね。すまないけど、今度はこの叔母さんの相手をしてやってくれるかい。面倒だろうけど」

僕がそういいながらそつと顔を見ると、魔女はビールのプルトップをプシュッと切りながら、僕を鋭い横目で睨み付けていた。美人だけど、怖い。

二日前の夕方。僕はあの大松の下にいた。すぐ前を大型トラックとか乗用車が唸りをあげて行き過ぎていた。右から左から、眩しいヘッドライトと朱色のテールランプが行き交っていた。今はこんな有様だけれど、二百七十年前のこの辺りはどんな様子だったのだろうか。

この辺り一帯が鹿ノ出口村と呼ばれていた時代。辺り一面はずつと山だったのだろうか。そして、その山の中に一本、街道が通っていた。その両側には松並木が続き、夏の日には土埃がたつような細道だったのかもしれない。そんな路傍にお地藏さんがあり、村の人達は通りがかるたびに手を合わせ、祈っていたのだろうか。そういう日常があつた。道路の向こうに広大に広がるショッピングモールを眺めながら、そんな風景を想像した。

そして飢饉が起きた。飢饉はある日突然起きる訳ではないだろう。夏の天候不順とか、水不足とか、幾つかの兆候がある筈だ。人々は少しずつ真綿で首を絞められるような飢饉の兆しに怯え、不安な毎日を送りながら、そして避けようもなく飢饉が襲う。

食べるものがない。家族揃って、村中揃って、為す術がない。そして、ひとり、ふたり、と餓死者が出る。五

人、十人と、痩せ細って死んでいく。冬になれば寒さも襲う。ようやく長い冬が終わる頃には、数百人も村人の屍が横たわっている。

「たすけて」

「たすけてください」

「おにいちやん、たすけて」

阿弥陀如来の後ろから声が聞こえた。振り返ってみても誰もいない。細く消え入るような声だった。

気のせいかもしれない。細く消え入るような声だ。暗がりにはぼんやりと、小さな女の子の姿が浮かび上がってきた。黒い壁に背をもたせ、今にもくずおれそうだ。土間に投げ出した素足が痛々しい。痩せこけて、うつろな目で僕を見ている。どうすればいいのだろう。助けてとはいっても、助かるとは思っていないような、悲しい目の色だ。

「どうすればいいんだい？　僕に何ができる」

僕がそう言ったとき、ぼんやりとしたその目にほんの一瞬だけ光が灯ったような気がしたのだが、その子の姿はそのまま闇に消えてしまった。

繋つながった。二百七十年前と。でもこの後どうしたらいいのだろう。僕は困ったときの魔女頼みとばかり、すぐさま叔母さんに打ち明けた。叔母さんは、こういう話にはことのほか燃える人だ。

僕が今まで調べた覚え書きのノートを見せると、ググツと顔を近づけて言った。

「何でもっと早く教えてくれなかったの。おかしいと思ってたのよ。あんた、このところずっと挙動不審だったものね。そう、こんなこと調べてたの。やるじゃない。後は私に任せな」

野菜の天ぷらが沢山油の中で泳いでいるというのに、僕に菜箸を押しつけると、魔女はそのままノートを持って阿弥陀如来像のところへ行ってしまった。僕は天ぷらの揚げ方は知らない。

次の日、魔女は赤い鼻緒の下駄を仕入れてきた。子供の用のものだ。

「その子はおそらく、そのヨシって子よね。間違いないと思うわ。あんたの気が通じたんだと思う。ヨシヨシ、さすがは私の甥ッ子だわ。町田家の血はミラクルなだよ」

魔女は自分でも気づかないようなバカな駄洒落を言つて、張り切っていた。

日暮れを待って大松の根本にローソクを灯し、下駄を供えた。

「きつと、想い出して欲しいのよ。自分たちの事を。その子はヨシさんだけど、その子だけじゃないと思うよ。その子の中にはもっと沢山の子供達がいる。私はそう思う。飢饉があると真っ先に犠牲になるのは、力の弱い子供達だったのよ。体力が落ちれば病気にも罹^かりやすくなるしね。何百何千の子供達の魂がそのヨシさんよ」

そして、森の広場に灯が灯り、空一面に薄紫の帳^{とばり}が降りる頃。

「あなたはカノデグチムラのヨシさんでしょう。ヨシさん。よしこさん。芳子さんがいいかな」

魔女はまるで目の前にヨシがいるかのように、話しかけていた。

そして、ヨシは現れた。赤い鼻緒の下駄を履いて。

深い絶望の淵から、ゆつくりと身をもたげた。

せつかくこの世に生まれてきたのに、何もいいことはなかった。短い一生だった。一生と言えるほども生きることができなかった。父も母も友達も、みんな死んでしまった。そして自分も。

でも今想い出してもらえた。自分がいたことを。いつか、この世に自分がいたことを。ありがとう。

ヨシは闇の中から光の指す方へ、細い腕を伸ばした。黒い服の魔女は、しっかりとした眼差しでヨシの手を

受けとめた。

「ありがとうございます。綺麗な下駄。大事にします」
それからというものは、夕暮れ時になると僕と叔母さんは、まるで恋人を取り合うみたいにして芳子と話している。

可愛い仲間ができた。

もう何年も前に離ればなれになってしまった友達とか、知り合いとかって、誰にでもいると思うけれど、そういう人のことを突然想い出すようなことってないだろうか。僕はよくある。そんな時はきつと、相手の人も自分のことを懐かしく想い出してくれているのです。僕はそう信じている。

それは、もうこの世にいらなくなってしまった人でも同じなのです。自分がその人のことを忘れないでいる限り、きつとこの広い空のどこかで、自分のことを思っていてくれる。だから、僕は寂しくない。

「ねえ、そうだね。爺ちゃん」

ほら、そう思って振り向けば、爺ちゃんはいっただって縁側に座って、新聞を読んでいるんだ。

了

「敦賀」

池窪弘務

—

私は勝手に彼（？）をムツシュと呼んでいる。時々、夕食に立ち寄るファミリーストラン。夕食時も混雑していない。私は大きなテーブルで、小さな夕食をとるのが好きだ。今日はミラノ風ドリアとトマトサラダ。気が向けば仕事もする。とりとめのない事を考える。派遣社員は、社員のことを社員さんという。蔑視か、羨みか。もちろん私もそう呼ぶ。同じ仕事をしながら待遇がまるで違う。会社の都合でいつ首を切られても……。ああ、こんなのでいいのかなあとも思う。年齢は容赦なし。結婚……。気の小さな私が、他人と暮らしていけるだろうか。それも男と。ムツシュが来た。彼がメニューを広げる。メニューにつけられた番号を押す。ボタンはムツシュの胸にある。

「ミラノ風ドリアとトマトサラダ。ありがとうございますました」ムツシュは復唱する。

料理を待つ間、小説を読む。「老人と海」・ヘミングウェイ・福田恆在。短い小説を何度も読む。

「この男に関する限り、何もかも古かった。ただ眼だけがちがう。それは海と同じ色をたたえ、不屈な生気をみなぎらせていた」

海と同じ色。長い間、海を見ていない。次のお休みに行ってみようか。海が見たくなる。

「お待たせしました」

ムツシュが料理をテーブルの上に置く。

「ありがとう、ムツシュ」

私は声に出さずに言う。

冬の日、仕事で遅くなった。ファミリーレストランは閉まっているだろう。コンビニで何か買って帰ろう。色々考えながら、冬の夜道を歩いた。ファミリーレストランに電気がついていたら。何気なく覗くと、ムツシュがいた。床に掃除機をかけていた。彼は眠る必要も、食べる必要もない。私はそんなムツシュを見ていた。

二

年が明けても、私の日常は変わらない。会社へ行って働いて、家に帰って眠る。去年の、もう、去年になった、天皇誕生日に海を見に行った。誰もいない浜辺に座って海を見ていた。寄せては返す波を見ていた。私はこんな所で何をしているのだろう。友達もいない。正月は家に帰ろう。でも帰らなかった。もう家には私の居場所がない。ムツシュのことを思った。私はムツシュと同じだ。

*

今日は思い切って、「お子様ランチ」を注文した。ムツシュなら……。「お子様ランチ。ありがとうございます。ございました」と復唱する。ボーイが確認に来た。すごいやな気分になった。私は思わず言ってしまった。

「おかしいと思う、君」

「機械ですから」

私は立ち上がった。

「もう、いい」

その日、夕食を食べなかった。

三

雪が降った。今年はよく降る。三回目。私はいつもの

ファミレスにいる。今日もムッシュがいない。雪だから客も少ない。車はのろのろ運転だ。車のライトで浮かび上がる雪の白さは美しい。とつくに冷めてしまったコーヒ―を前にして、深いため息をついた。ムッシュがいないレストランは、私の中で急に色あせていった。ウェイトレスが何回目かの水を注いだ。

「ありがとう。ここにいたロボット、近頃見かけないけれど」

「ああ、いなくなっただけですね」

「どこへ行ったの？」

「知りません、何なら店長を呼びますが」

私は少し考えた。

「すみません、お願いします」

私は何を考えているのだろう。

ほどなくやってきた彼に見覚えがあった。お子様ランチの時の彼だった。あの時は若く見えたが、三十を少し超えていると思う。彼も私を覚えていた。

「あの時の」

彼は私の前に腰掛けた。

「ロボ・ボーイのことですか」

「ええ」

「彼は試作品だったんです。問題がありました。その一つは子供です。怖がる子供といたずらする子供。それと……」

彼は言いよんだ。

「私の主観なんですけれど」

彼が話し始めた。とても不思議な話だった。

「初めは重宝していたんです。食べないし、休憩時間もいらない。文句も言いませんしねえ。一日中働く。閉店後の掃除は任せられる」

ただムッシュは少しずつ変化していった。

「私らにだって、苦手なお客様はいます。人間ですからね」

ムツシュの態度が、客によって微妙にちがってきた。そーと音を立てずに水を置く客と、少し乱雑に置く客。

「ロボ・ボーイの接客態度が悪い客は私らが苦手だと思う客と一致しているんですよ」

それが段々と激しくなってきた。水をこぼすようになってきた。やぐざに殴られると、反撃した。

「それと」

彼は言葉を句切った。

「彼は眠るようになった」

「眠る」

「私にはそう見えました。無反応になるのです。そういうことで返品しました」

「今はどこにいるのですか」

「敦賀だと聞いています」

「敦賀？」

「福井県じゃないですか」

福井県と言われても分からない。確か北陸だ。

「何なら、本部に聞いてみましょうか？」

「結構です。聞いてみただけですから」

「それはそうですね」

「でも、雪が深いだろうなあ。僕も北国の出なんですよ」

彼は出口まで送ってくれた。

「雪道は滑りますよ。気をつけて」

私の心は何年ぶりかで弾んでいた。敦賀へ行こう。ムツシュを探そう。

四

金曜日に敦賀へ行くことにする。久しぶりに休みを取

った。一人旅は何年ぶりだろう。大学の時はよく一人で出かけた。というより、人と旅することが出来なかった。枕を並べて他人と寝ることが出来なかった。一人旅は何も起こらない方がいい。ぼんやりとさまよるのがいい。過ぎ去っていく時間の中で、私は消えていく。どこにもいない。私は風になる。誰にも見えない空気になる。

車窓に琵琶湖が見えている。琵琶湖が見えなくなると、急に車窓が暗くなった。殺伐とした風景になった。雪が降り始めた。風も強いのだろう。黒と白の世界だ。私はどこへ行こうとしているのだろう。何を求めて。

敦賀は寂しい駅だった。目立つ色はなく、光の少ないモノクロ写真のような光景だった。線路やホームがたくさんある。雪はなかった。寒さが人の口を重くさせていた。こんな所にムッシュはいるんだ。昨日、ネットで、ロボ・ボーイで検索した。ムッシュがファミレスで注文をとる様子が出ていた。橋本製作所。原発の近くにある。敦賀湾に夕日が沈む頃、バスが来た。敦賀半島にある民宿に向かう。通された部屋は二階で、近くに海を感じた。カニはあまり好きではないので、お造りをたのんだ。ビールを一本。小食で、グルメではないが、魚はおいしかった。明日は十一時の約束だ。海に行ってみよう。

朝は十時に宿を出た。灯台が見えた。あそこまで行ってみよう。灯台の扉は開いていた。作業服を着た人が二人いた。

「見学してもいいですか」

いつもなら言わない言葉が出た。二人は驚いたように私を見た。

「いや、いいです」

「かまわないですよ。どうぞ」

彼等は一月に一度の点検に来ているのだと言った。階段を上る。無限階段と言うだまし絵を見たことがある。

最上階に着いたと思ったら、そこは一階なのだ。上がるのと降りるのが重なった空間。長い螺旋階段を上がりながら、恐れた。

日本海は、暗く、荒れていた。宿で、おにぎりを作りました。言ってくれたが断った。他人の手で握られるのがいやだった。昨日駅で買ったパンを食べた。荒れている海には何もない。私はコートの襟を立て、タクシーを呼んでもらうため、宿に帰った。

五

橋本製作所は原発のそばにあった。原発向けのロボットを作っている。ムッシュは危険な場所で働かされているのだろうか。受付で、柳原という人を呼んでもらった。痩せた童顔の男が出てきた。

「ロボ・ボーイの事で来られた村瀬さんですね？」

「はい。譲ってもらえますか？」

「まあ、倉庫にいますが。修繕の方が高くつくんですよ。でも開発費が結構かかっていますから、捨てるのもちょっと。回路を取り替えました。何に使われるんですか？」

私は黙った。

柳原さんはまあいいやという感じで、

「上司と相談して、二十万円でいかがですか？」

思っていたより安い。五倍でも買うつもりだった。

「大丈夫です」

「それじゃ宅配で送ります」

私は住所を書いた。彼は振込先を書いた。

「すぐに、送りますよ」

「えっ、振り込むのが遅れるかもしれません」

「全然かまわない。あなたはそんな人じゃないから」

ちよっと上目遣いに私を見て、

「もう一人、あなたと同じことを言ってこられた方があ

るんですよ。タッチの差であなたの方が先だった。あつ、来られましたよ。多分あの人だ」

ドアを開けて入ってきた男に見覚えがあった。ファミレスの店長だった。彼ははにかみながら近づいてきた。敦賀まで一緒にタクシーで帰った。車内では一言も喋らなかった。

駅に着くと、

「僕はもう少し先に行ってみようと思います」と、言った。

私は京都に帰ると言った。

一回だけあの長いトンネルを通ったことがある。出口がないような長いトンネル。ずーと暗闇の中にいるようで怖かった。敦賀は私の終着駅だ。

「それと」

彼は言いよんだ。

「あなたの家に行っていていいですか？ 私は水村と言います」

彼は名刺を出した。水村優。優の字にユウとふりがながあった。

私はしばらく黙っていた。彼も言葉を続けなかった。私は名刺を持っていない。私の仕事には名刺が必要ではなかった。私は手帳を出し、私の住所と名前を書いた。携帯の電話番号も書いた。電車の時間が迫っていたので、私はホームへ急いだ。振り返ると彼が手を振っていた。私は無視して、ホームへの階段を上がった。柳原さんが、帰りがけに言った言葉が突然頭に浮かんだ。

「ロボ・ボーイが死ぬ日が来ます」

「死ぬ……」

「全機能を停止する日です」

私は何故か分かるような気がした。彼は続けた。

「明日かも知れないし、百年後かも知れない」

日曜日にムッシュが送られてきた。

「ムツシュ（ロボ・ボーイ）が来ました」と優にメールを送った。

「月曜日の午後八時に伺います。ムツシュとの再会が楽しみですです」

「了解」

久しぶりに再会してスイッチを入れた。メニューボタンを押した。当然お子様ランチ。

「お子様ランチお一つですね。ありがとうございます」
懐かしい声が聞こえてきた。

「ムツシュ。君の名前はムツシュ」

「私の名前はムツシュ。名づけていただいてありがとうございます
ございます」

「ムツシュ」

「はい」

「聞いてもいい。君には心があるの」

「こころ……。分かりません。プログラムされています」

私はムツシュをキッチンに連れて行く。コップをとり、蛇口を押す。

「できる？」

「はい」

ムツシュは正確に私の行為をまねる。私は拍手する。
「完璧だよ、ムツシュ。私についてきて」

私のマンションは二DKだ。一部屋は机とパソコンを置いて書斎ふうに使っている。もう一つの部屋は寝室。

「掃除をお願いね」

彼自身が掃除機になっている。掃除をし始めたので慌てて言った。

「いいの、明日からで」

ムツシュは頷いた。

「分かりました。あなたの名前は？」

「私は村瀬瞳」

「私はなんて呼べばいいのでしょうか」

「瞳でいいよ。ひとみって呼んで」

「ひとみ」

「はい」

「とても素敵な名前ですね」

私は再会を祝して、ワインを抜いた。

「ムツシュ、君と私に乾杯」

月曜日の午後八時。優はきっかりにやって来た。ダイニングに通す。ムツシュがお茶を運んでくる。

「ムツシュ、こんにちは」

「いらっしやいませ、店長」

「店長はいいよ。優と呼んで」

「こんにちは、ゆう」

その日は、三十分ほどして優は帰った。

「また、来てもいい」

「いいよ、この時間ならほとんどいる。いない時はメールする」

「ありがとう」

一週間に二回ぐらい優は来た。時々泊まってく。一つしか布団がないので、彼は寝袋を持ってきた。私は吹き出した。私とムツシュは寝室で眠り、優は書斎で眠った。書斎のパソコンは寝室に移した。二つの部屋はダイニングに面していて、手洗いに行く時お互いの部屋を通ることはなかった。部屋の個性は保たれていた。

私は彼のことをなんにも知らない。結婚しているのか、子供がいるのか、何も知らない。年令さえ知らない。私は向かい合う。相手が何者かは関係がない。前にいる人が彼だ。私が知っている以外の彼を知りたくない。私は向かい合い、とりとめのないことを喋る。テレビのニュースだったり、新聞だったりする。私達の間にセックスはない。だから、向かい合うことが出来る。優は

時々朝ご飯を作る。おいしいというと、とても嬉しそうな顔をする。夜はムツシュと私は枕を並べて眠る。平穏な日々が過ぎていく。

六

春になった。私は春が嫌いだ。春は生殖のにおいに満ちている。性器である花は咲き乱れ、生殖を担う虫や鳥が飛び交う。なんていやな季節だろう。優と私とムツシュは一日中部屋の中にいた。珍しく休みが一致したのだ。テレビも一日中桜を映している。昼食後、事件が起こった。後片付けに動き出すはずのムツシュが動かない。二人はムツシュを見つめた。ムツシュが動かなくなった。

「ムツシュ」

語りかけても無反応だ。

「電池切れかなあ」

優が首をかしげた。

「ムツシュは電池で動いていたの？」

「さあ。でも、energyは「エネルギー」だよ」

「死んだ」

私がぼつりと言った。

「死んだ」

優は繰り返した。私は少し泣いた。オブジェになってしまったムツシュを寝室に運んだ。優は私の肩を抱いた。私は目を閉じた。桜の花びらが舞っている。優の涙が私の胸に落ちた。強いものに突かれた。気の遠くなるエクスタシーが私の全身を震わせた。二人は満開の桜の下にいた。優の身体が離れ、やがて、降り注ぐ無数の桜の花びらの中に消えていった。彼は私の身体にしるしを残した。生まれた瞬間に死が約束される「いのち」。

私はその命と一緒に生きていこうと思った。

二〇〇九年一月一六日 了

執筆者

積 緋露雪 住所 栃木県小山市犬塚 5-8-5

メールアドレス hiroyuki_225@tvoyama.ne.jp
ブログ <http://crimson-fox.iza.ne.jp/blog/>

長谷川 幸信 住所 福島県須賀川市仲の町 125-2
メールアドレス <mailto:hyuki@nxyzbb.ne.jp>
ブログ <http://blog.goo.ne.jp/2469hyuki>

池窪 弘務 住所 奈良県磯城郡田原本町千代100-7
メールアドレス <mailto:mskw51396@gaia.eonet.ne.jp>
ブログ <http://blog.goo.ne.jp/ikekubo1946/>

編集後記

三人でスタートしました。参加者（読み手も書き手も）を募集しています。今は十一人ですけれど、百人規模になれば、精選した作品の同人雑誌になると思います。なぜネットなのか。よい本を出したいという夢があるからです。そのためには自分の作品が載るか載らないかという事は小さな事だと思います。例えば百人の人が参加したらどうでしょう。自分以外の作品を評する。読み手だけの参加もある。ベスト10で素晴らしい同人雑誌が作れる。自分の作品をUPするだけなら、ブログで十分です。ネットの素晴らしさは、みんなで一つのものを作れる可能性を秘めていることだと思います。千人になったら、既存の文芸雑誌以上のものが作れるのではないですか。既成のものに捉われない良い作品を読みたい。書きたい。それがただ一つの目的です。ゴッホの絵は生前一枚しか売れなかった。既成の評価にとらわれない作家がいると思います。現在の同人雑誌や文芸雑誌にないものを目指したいと思います。

池窪弘務